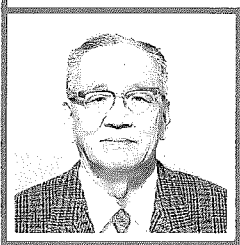


# ロータリー創立記念に思う



第2680地区パストガバナー  
森 滋郎（姫路南）

1905年2月23日4人で始まったRotaryは現在185カ国2万6,000クラブ115万人と大発展しました。Rotaryの歴史について残された記録を見ますと想像できない激しい争い、討論、切磋琢磨の場面があったことがわかります。

ポール・ハリスは正義感に強く頭の抜群に良い本当に立派な人であるといわれておりますが、やはりキリストさまでもお釈迦さまでもなく生の人間らしいものがブンブンとおう人でした。青年時代の非常識な振る舞いなど祖父、祖母に随分心配をかけたことも事実ですし、また彼に対し極端な悪意を抱いたバーモント大学長のマシュヘンリー・バックハムのような人のいたことも事実でした。

## 親睦派と奉仕派の暗闘

最初のRotary Clubは激しいシカゴの生存競争の中でキリスト教徒的な善意の人々による仲よクラブでしたが、ドナルド・カーターの指摘により社会奉仕の考えが綱領に入りました。当時のロータリアン同士の取り引きの記録にも残っているようですが、あまり利益追求が激しくなったため、1992年版邦訳『手続要覧』95ページ「ロータリアン間の取引関係」にありますように「Yours trulyの代わりにYours Rotarilyという字句を署名すべきでない」という注意が現在も抹消されずに残っています。

そして親睦派のハリー・ラッグルスと奉仕派

のポール・ハリスやフレデリック・シェルドンとの間に相当激しい暗闘もあったようです。

ハリスは3代目会長になりましたが、途中で会長をやめてラッグルスが後半と次年度の会長になりました。またハリスは5代目会長にチェスリー・ペリーを押ししましたが、親睦派のラムジーが会長になりました。この時、クラブは赤組親睦派、青組奉仕派と2つに分かれ、最後は選挙で決定したということです。負けたペリーは翌年事務総長になりました(1910年)。当時のRotaryのドサクサがうかがえます。

当時のロータリアンの指導は会員の利益振興と親睦に社会奉仕が加わった綱領(1906年)とシェルドンやフランクリン・コリンズの奉仕哲学(1910年)でしたが、ハリスはまだまだ不十分と考え、1915年(サンフランシスコ)に道徳律およびガイ・ガンディガーの『ロータリー通解』などを取り入れました。綱領も1906年に3カ条1910年に5カ条といろいろ積んだり崩したりして1935年(メキシコ)にやっと今の形となりました。そして1951年(アトランティックシティ)にObjects(綱領)のsを取り去りました。1911年に採用された「He Profits Most Who Serves Best」と「Service Above Self」のモットーも正式に標語と決定したのは、40年も経た1950年(デトロイト)でした。また「He Profits Most…」が第1モットーで「Service Above…」が第2モットーでしたが、1972年(ヒューストン)に「Service Above…」を第1モットーにし

ようという提案が出され大阪の故塚本PGがこれを取り下げさせましたが、1989年にとうとう入れ代わり「He Profits Most…」が第2になりました(『手続要覧』188、280ページ)。このようにロータリアンは真剣にRotaryの原点を考えてロータリーライフの向上に努力してきたことを忘れてはなりません。ハリスが「Rotaryは寛容の精神である」と言われたのは反対意見も十分に取らねばならぬ心の広さを求められたのだと思います。

毎年RI会長は、その年度に奉仕の実践をテーマで示しておりますが、その始まりは1953年ホアキン・シビルスで「クラブがふえれば友人が増す、友人がふえれば奉仕の機会が増す」とモットーらしいことを申しましたが、私はこれは彼の独り言のように思います。次のハーバート・テラーはちょうど創立50周年にあたり「四つのテストを強調せよ」とか「ロータリーを他に分け与えよ」など6項目を掲げ、それ以来会長はテーマを出すようになりました。

初期のものは「われらの資源を開発しよう」「行動に努めよ」「ロータリーに生きよう」など質の向上を求めたものでしたが、リチャード・エバンス(1966-67)の「ロータリーでよりよい世界を」という辺りから世界に恩恵を与えようとする言葉になりました。このような時代の移りかわりにロータリーも順応するのは当然で、ハリスも「Rotaryのストーリーは何回も書き換えられねばならない」と申しております。Rotaryの創立記念に際し今後の変わり方について考えるのも有意義でしょう。

## もう1度原点に立ち返ろう

さてRotary発展の要因に歴代会長のRotary精神と事務総長ペリーの業績を忘れてはなりません。ペリーは1910年から43年まで年俸わずか1ドルで事務総長を務め、後シカゴの会長になったスバラシイ指導者でした。また1業種1会員

制も大きな力があつたと思います。もしそれがない結果をもたらしたでしょう。しかし、現在RI本部は一流大企業並みの大オフィスとなり維持にばく大な経費が必要となりました。そして合理化や経費節減のため支出を削減し今までの1地区1人以上の奨学生制度も一定の寄付額に達しない地区からの学生はとりやめました。また会員25人以下のクラブでも25人の分担金を払わなければならないという考えもあるようです。分担金が払えないで311クラブが資格停止になっている現況(『友』10月号菅野元RI理事)など考えて、何か空恐ろしいRI本部の空気を感じるのには私だけではないと思います。こんな弱いクラブや地区の人々にこそRotaryを分けてあげるようにするべきではないでしょうか。

また、Rotaryの発展に会長の1年交代制も大きな力を持っています。トップの1年交代では立派な仕事ができないと思われませんが、Rotaryの理事会や運営組織は実にうまくできております。しかし、今後Rotaryが業績を高めるための資金作りにこの世界的Rotaryの組織を利用しようとする株式会社の考えの理事が出てくると大変です。私たちはもう一度原点に戻り綱領をよく読んで考えましょう。

皆さんは綱領といえば「4項目のこと」だと思っておられませんか？ 本当は始めの3行だけが本当の綱領です。既述のようにObjectsのsを取ったのはこのことだと思います。すなわち有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹しというところまで、このあとに4項目をしっかりとやりなさいということです。またTHE 4-WAY TESTは①「真実か」②「公平か」③「好意と友情か」④「みんなのためになるか」の4つが4つのテストと思っておられませんか？ 4-WAYにsがないのは①、②、③、④の数を示すのではなく四方八方すべての道に通ずるテストという意味だそうですね。